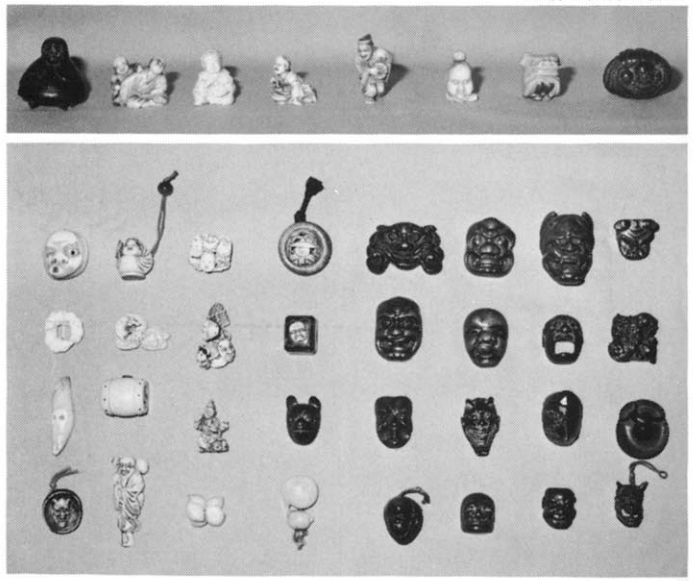
美術随想 (13)

忘れがたい秋の一日 ～エルランゲル・ジョーナス・コレクションの寄贈を受けて～

大和文華館 館長 石澤正男

▲感謝状を読む（左より石澤館長、ジョーナス博士・同夫人、エインズワース米国総領事・同夫人）

寄贈の根付40点▼



去る10月29日の日曜日午前10時半から大和文華館では、ごく内輪に根付の国際的贈呈式が行われました。贈り主は、わざわざこの目的のためにアメリカ合衆国ニューヨーク州のゴーシェン(Goshen)という閑静な町から来日されたハロルド・J・ジョーナス(Haroed·J·Jonas) 博士とジィーン(Jeanne)夫人です。式に立会ったのは特にお願いして御出席していただいた大阪・神戸駐在のアメリカ合衆国総領事トーマス・W・エインズワース(Thomas·W·Ainsworth)御夫妻とわれわれ大和文華館の館員一同だけでした。

ここでは、ジョーナス博士御夫妻が長年手許に置いて愛蔵されていた多数の根付の中から最も優秀なものを40箇選んで、大和文華館に寄贈されることになった経緯を後日のために、記録に留めておくことにしました。

ジョーナス博士と私が知り合ったのは、私が1930年から満2年間ニューヨーク市のメトロポリタン美術館極東美術部に勤務中のことで、彼は当時コロンビア大学の大学院学生でした。その頃私はニューヨーク市中心部となっているマンハッタン地区の東部を流れるハドソン河畔のグラント将軍廟を見おろす位置に建てられているインタナショナル・ハウスに住んでいました。このハウスの前面には広い芝生の庭を距てて、荘麗な近代的ゴシック様式のリヴァーサイド・チャーチが屹立していました。インタナショナル・ハウスは諸外国からニューヨークの各大学に留学する外国人学生や交換教授のために建てられた大規模な建築で、リヴァサイド・チャーチと同様ロックフェラー財団によって建立されたものであります。インタナショナル・ハウスはその設立の趣旨から、外国人優先ですが、米国人も一定の限度内で入居を認めていたようです。若い日のジョーナス君もその1人であったわけです。普通の部屋には、浴室はなく、各階ごとに広いシャワー室と便所があるだけでしたが、建物の最上部には2室の中間に共用の浴室のついている特別室がありました。ジョーナス君と浴室を共用することになったのが文部省留学生として海外留学中の理学博士小山準二さんでした。小山さんは当時第六高等学校教授の動物学者で専攻は「さんしょう魚・いもり・かえる」のような両棲類でした。アメリカ史専攻のジョーナス君とは専門が違うばかりでなく年令差も大きい2人ですが、妙に気が合ったと見え非常に親しく交際するようになり、2人の親交は今日も続いているのですが、現在小山さんは老令で健康も勝れず、今回の贈呈式にも参列していただけなかったのは吾々にとって残念至極でした。ジョーナス君を私に紹介してくれたのは、いうまでもなく小山さんでした。

学位もとり結婚もしたジョーナス君は新婚旅行を兼ねて1935年頃来日し暫く日本旅行を楽しんで帰国しましたが、その時旧知の小山さんや私ともゆっくり会う機会がありました。この最初の日本旅行でジョーナス君は始めて根付という日本独特の小彫刻に接し、その変化に富んだ主題と材質、巧緻を極めた技法などにすっかり魅せられたようでした。

その後吾々の間には日米間の不幸な国交のもつれ、引き続いて最悪な戦争のため長い空白の時が経過しましたが、戦後の混乱期が次第に収束し、平和が回復されてから、ジョーナス君は度々日本を訪ねて、旧知の人々と友好を温めるのを心から楽しみにしていました。時には奥さんと2人で、時には息

子さんを伴って来られ、暫く九州におられた前記の小山準二さんを再三訪ね、北は北海道の稚内までも自動車旅行をしましたが、また奈良にもその都度私を大和文華館に訪ね、奈良ホテルや月日亭で楽しく会食するのを例としていました。そんな間柄でしたから吾々はずっと前から堅苦しい呼びかけはやめにして、彼は私をマサオと呼び、私は彼をハロルドと呼びならわしてきました。

先日の贈呈式の時、私はジョーナス博士御夫妻を御臨席下さったアメリカ総領事エインズワース御夫妻を始め同席の同僚諸君にひとりひとり紹介し、それから遥々貴重な根付を入念に梱包して自分の手で特参された御好意に甚深の謝辞を述べました。それに答えられてジョーナス君の述べられた言葉を要略しますと「私ども夫妻はこのような心からの謝辞を大変ありがたく拝聴しました。私どもが長い間始終手にとって、ためつ、すがめつしてきた沢山の根付の中から石澤君が特に選ばれた40箇の根付を、かねがね私が最も気に入っている美術館である大和文華館に差しあげることを心から光栄と思い、また最大の悦びとするものであります。それは半世紀に近い石澤君との友情を記念しようとするものでありますが、同時に私どもは大和文華館という公共の施設を通じて、私どもが長らく抱いてき日本の国民の皆様に対する尊敬と親愛の情を表現しようとするものであることを申し添えさせていただきたいと存じます。私どもが集めた根付は特に優秀なものであるとは全然思ってもおりません。ただ現在の日本の若い人々は根付といっても、それがどんなものかを知らない人たちが餘りにも多いのに驚きました。私どもが大和文華館に差しあげるこれらの根付が今の日本の若い人達を啓蒙するのにいささかでも役立てば幸甚です。序にこれらの根付をエルランゲル・ジョーナス・コレクションと名付けた理由は他でもありません。と申しますのは私ども夫妻はどちらも独乙系のエルランゲルを先祖としているからであります。」

次いでエインズワース総領事様から、この日米両国民間に人知れず交わされた誠に麗わしく純真な国際親善の行事をたたえる印象深い御挨拶がありました。

大和文華館からはジョーナス博士御夫妻に薄茶用の籠製茶箱に必要なもの一切を揃えて、記念に差しあげました。抹茶や甘味、香合香木等も添えました。それから春日山麓の彼の大好きな月日亭で午餐を共にしてから、お互いに名残りを惜しみながら、近い日の再会を楽しみにお別れしたのであります。その後ジョーナス君からは再三お便りがあり、10月29日を自分の生涯における最も重要な一日と書いてこられました。この日は私にとっても同様で、私のこれまでの長い美術館生活を通じて、正に忘れがたい佳き秋の一日でありました。

今回は御寄贈を受けた箇々の根付について御紹介する餘裕はありませんので、それは他日に譲り、ここでは全体の写真を掲載するにとどめます。大和文華館には国内ばかりでなく海外にも多くの親しい友人をもっておりますが、1971年にアメリカのカルフォルニア州パロ・アルト町のジェームス・E・オブライエン御夫妻から御愛蔵の根付コレクションから精選された根付17箇の御寄贈を受けました。その事は「美のたより」18号で詳しく読者にお伝えしました。その記事の中で根付についても一応説明しておきましたので御参照いただきたいと存じます。(78・11・30)

季刊 美のたより No.45
昭和54年1月5日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.